

# 阪神・淡路大震災における地方紙と全国紙地方版の比較研究

－発生直後と20年後を通して－

塩原良和研究会 10 期

田中友樹

## 目次

1. はじめに
  - 1.1 問題意識と研究目的
  - 1.2 先行研究
  - 1.3 研究方法・調査方法
2. 二紙の比較
  - 2.1 比較方法
  - 2.2 比較結果
  - 2.3 考察
3. 20年後の報道
  - 3.1 比較方法
  - 3.2 比較結果
  - 3.3 考察
4. 温度差の原因
5. 総括

## 1. はじめに

### 1-1 問題意識と研究目的

1995年1月17日に発生した、阪神・淡路大震災の発生から2020年で25年が経過する。この四半世紀で被害を受けた神戸の街は復興を遂げた。私は、生まれてから高校を卒業する18年間、神戸で過ごしてきた。私自身は、震災発生当時、まだ生まれていなかった為、直接経験してはいないが、私の両親、祖父母は当時から神戸で生活していたため、被災者となった。特に、兵庫県神戸市兵庫区に住んでいた母方の家族は自宅が半壊、近くまで火災が近くという甚大な被害を被った。また、私の母は、私の叔父に当たる弟を震災関連死で失った。毎年1月17日に神戸市中央区、東遊園地で行われる「阪神淡路大震災 一・一七のつどい」に祖父や母と何度か赴き、そこで発生時刻に黙祷をする度に、普段は見せない涙を見せる母の姿を目にしてきた。このように、私は震災を経験していないが、叔父の震災関連死を通して、阪神・淡路大震災は私のアイデンティティに深く関わる出来事となっている。また、家族の過去の経験としての記憶だけではなく、「阪神・淡路大震災」を一つの歴史的な出来事

として、学校の授業において当時の状況について学習する機会があった。それだけではなく、市内に存在する震災の爪痕を残した場所や、防災・減災を目的とした機関「人と防災未来センター」（神戸市中央区）で震災の追体験をすることができるなど、震災を経験していない世代が知ることのできる機会が多く存在した。

こうした、当時の被害の状況というものは、その後時を経て体系化、あるいは可視化され、「知る」、「学ぶ」といった側面が多いように感じた。メディアの報道が蓄積され、20年以上経った今、自分がその状況を知るという一方で、震災当時、被災者や関西圏では、どのように報道がなされていたのかということについて疑問が生じた。

災害とメディアの関係について、山中茂樹は以下のように指摘している。

メディアにとっても、1995年は、戦後民主主義とともに歩んできた客観報道や取材倫理の根底に疑問符が突きつけられる出来事の連続であった。被害報道が中心であった災害報道に安心報道というカテゴリーが提示され、安否を確認するためとはいえ個人情報保護のオンエアや、生活情報の繰り返し掲載など、それまでなら禁じ手であった報道・編集ルールがことごとく破られた<sup>1)</sup>。(山中 2018: 131)

このように大きな起点となった、阪神・淡路大震災における報道に起きたことについて、検証を踏まえ、新たな捉え方や、課題について社会学の視座から考察したい。

阪神・淡路大震災の被災地は文字通り、大阪府、兵庫県を中心として広がっている。こうした中で、メディアにおいても発信する場所で、情報の内容と量が変動することは想像に難くない。災害の当事者となった、神戸、大阪のメディアがどのように報道していたのか。また、その中でも、地方紙と全国紙でどのような違いがあったのか、という点に着目する。それぞれの新聞社、記者がどのような視点で震災を捉え、何を伝えようとしていたのかということ明らかにしつつ、震災から長い月日を経た後、各紙が震災をどのように捉え、被災地とどのように結びついているのかということについて分析していきたい。また、それぞれに違いがあるとするならば何故そのような違いが生まれたのかという原因についても考察したい。

25年前、神戸で被災した私の母に話を戻す。地震発生から数週間後に初めて、まだ瓦礫の残る神戸から大阪の街へ出た時、皆平然と生活し、女性がハイヒールを履いて歩いていたことに対して、衝撃を受けた、とよく話してくれていた。母は、「神戸の地震はもう忘れられてしまったのではないか」という不安と悲しみ、悔しさを覚えたという。

各章の概要としては、以下で、先行研究及び研究プロセスを紹介し、本論の方向性を確認する。第2章では、震災発生当時の新聞について期間を定めて比較を行う。第3章では、震災から相当な月日を経た後の新聞を比較した上で、震災とどのように結びついているの

かということを検証する。

## 1-2. 先行研究

災害の被害というのは、社会的な産物とされ、被害が発生するという点において、二つの要素が関係している。一つ目に、地震や津波、洪水、土砂崩れといった自然事象であり、これは「ハザード」と呼ばれる。しかし、このハザードだけで被害が決定されるものではない。二つ目の要素は、社会の脆弱性である。社会の中で、脆弱な素因を抱えたところに、ハザードが襲う結果として災害の被害が発生するとされる(立木 2016)。また、このハザードの発生にも自然的な要因だけが起因となるものではなく、社会的要因を孕んでいると指摘されている(萩野・蘭 2014)。行き過ぎた土地開発などで地盤が緩んだことによって土砂崩れが発生するという事例である。このように、震災も社会的な産物の一つに挙げられ、大規模な災害として認識される。日本では、この大規模災害である震災を過去に何度も経験してきたが、その中でも、20世紀末に発生し、その後21世紀の法律や制度、防災と行った分野で社会にも大きく影響を与えたのが阪神・淡路大震災である。

津金澤聡広(1999)は、阪神・淡路大震災における、流言の制御とマスメディアの社会的な役割を紹介する中で、雑誌『新聞研究』による被災者を対象に行ったアンケートを用いて、当時信頼できるメディアとして新聞が圧倒的な支持を得ていたことを指摘している。ラジオやテレビに比べて情報の速報性では劣っているにも関わらず、震災発生を機に、新聞の優位性が改めて確認されている。

被災地の住民にとって、わが家も街も破壊しつくされた中を必死の思いで新聞が配達されたということにどれほど励まされたかと語る人々が多い。生活情報についても新聞の活字を目にすることで確かめることができたという。(黒田・津金澤編 1999:181-182)

中林一樹・村上大和(1998)は、阪神淡路大震災の新聞報道について、阪神版と東京版の東西から比較分析がなされている。本論における、比較対象とは異なるが、阪神淡路大震災における新聞の比較分析という点から先行研究として取り上げたい。ここでは、被災地と非被災地に生じる「温度差」という点に着目している。全国紙一紙の記事のデータベースを作成し、一定期間内容別に分類した上で、災害報道が三つのフレーズに分けられ、そのフレーズに沿って、被災地と非被災地での「温度差」が生じる構図を指摘している。

発災から2～3週間までの、記事が増え続ける「情報収集期」と、発災から5、6週間までの記事数が最も多い「情報氾濫期」、そしてそれ以降での記事数が減少する「情報収束期」となる。そしてその後、非被災地への報道が見られなくなる一方で、被災地では日

常に記事が掲載される「被災地情報限定期」である。(中林・村上 1998: 230)

この「情報収集期」から「情報氾濫期」にかけては、「非日常的」な状況であることによって、被災地には被災情報として、非被災地には「事件」として多くの情報が伝えられる。ところが、「被災地情報限定期」に達すると、被災地では、避難生活やライフライン等の復旧が日常となり、非被災地にとって直接関連する情報とはならない為、非被災地での報道数が減少する。つまり、阪神淡路大震災においては、「日常的であるかどうか」、「事件性」の有無が分岐点となり、被災地と非被災地の間に記事の数と内容の差が生まれたと指摘している。

この結果、非被災地では被災生活におけるストレスの背景や、市街地復旧の動きなどは報じられず、新しい防災対策や再建を果たした市街地、ボランティアの活躍などだけが震災に関することとして報じられ、受け止められるのである。(中林・村上 1998: 231)

こうした、非被災地での報道との違いによって、被災地と非被災地での「温度差」が生じることとなる。

山中(2015)も、雑誌『兵庫地域研究』の調査レポートを用いて、1999年1月10日から20日までの期間における朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日経新聞の4紙の震災報道東西記事を比較している。ここでも、東西に格差があったことが指摘されている。

特別に1ページまるまる震災報道で構成されている特集紙面は、朝日、読売とも神戸紙面の計10ページに対し、東京紙面は4ページ。毎日は神戸紙面の4ページに対し、東京紙面はゼロ回答という冷たさだった。(山中 2015:10)

また、このように復興に関する記事が、全国的なニュースになりにくいのかということについては、長期にわたること、被災者支援や街の復興は主に地元でしか関心がもたれないこと、「『被災者生活再建支援法』のように被災地の自治体や住民が制定運動を始めて成立するまでに紆余曲折があり、さらに改定運動が続く被災地支援をめぐる制度要求運動は、実に複雑な経過をたどるケースが多いこと」(山中 2015:24-25)の三点が理由として挙げられている。

このような東西での温度差だけでなく、甚大な被害を被った神戸と比較的被害が少なかった大阪との温度差について、小城英子(1997)は指摘している。ここでは、被災した記者だけでなく、東京から応援にきた記者たちの経験や当時感じたことについての紹介を通して、報道の温度差について触れている。前章で私の母の経験談について記述したが、神戸と大阪での温度差というものが、個人の経験だけではなく、取材する記者の目線からも見て取れたことが分かる。

大阪では、地震当日こそ停電や鉄道の運休があったが、翌日から平常通りに動いている、デパートでは冬物のバーゲンセールをし、飲み屋ではどんちゃん騒ぎが行われていた。武庫川を境に、瓦礫の街ときらびやかな都会とに分かれていたのである<sup>2)</sup>。(小城 1997:84)

松井一洋(2012)は、『新聞研究』を研究対象として、比較分析を行った。ただし、ここでは、阪神淡路大震災と東日本大震災という二つの震災における新聞報道の比較がなされている。また、大震災報道において新たな視点を発見することを目的としている為、東日本大震災の報道については、原子力発電所に関連する報道は除いた上で、純粋に地震、津波に対する報道のみを対象としている。中村・村上(1998)と同様、本論とは比較対象が異なるが、分析の中で全国紙と地方紙の報道の視座について触れている。

我が国の社会システムとして、全国紙と地元紙という担当区分もしくは棲み分けが存在すること自体は、視座の違いの有効性を前向きに是認したい。先に述べたように、被災者の知りたい情報は、「何が起こったか」、「それはどのくらいの規模か」であり、「これからどう生きていくか(生活情報)」である。いわば、マクロとミクロの二つの情報がともに必要である。(松井 2012: 22)

新聞社のニュースバリュー判断の同一性によって、欠け落ちてしまう地元情報があるからこそ、地元紙は、あくまでそれぞれの守備する地域において「被災地からの通信」掲載するだけでなく、その地域における情報の徹底した深耕を目指すべきである。(松井 2012: 23)

全ての報道が被災者の生活情報に偏るのではなく、被災地にある地元紙と全国紙は視座が異なることで、伝える情報のバランスを取ることが求められる。

以上の先行研究から、同じ被災地の中にも違いや温度差があるのではないかという仮定に行き着いた。全国紙の地方版にも先行研究の全国紙と同じ側面を持つのではないだろうか。被災地の中では、地方紙と全国紙地方版に違いがあるのか？同じ関西地方に読者を持つが、特に被害の大きい兵庫県に根付いた地方紙である神戸新聞と、地方面で各地方についての記事を掲載するが、主に大阪を中心とした記事を書く全国紙に違いはあるのか？この問いを研究の出発点として、先行研究で指摘されている「情報収束期」「被災地情報限定期」において、被災地で読まれる地方紙と全国紙にどのような温度差があるのか、またその温度差が現在の神戸にどのように結びついているのかについて明らかにしていく。

先行研究において、「被災者の声」といった内容の記事数は、震災発生から増加するものであるという指摘がある。実際に、13~15週目に若干数ではあるが増えるというデータがある(中林・村上 1998)。その言及をもとに、震災発生から3ヶ月にあたる4月17日から

の一週間に記事を比較することにする。正確には13週目は4月18日からであるが、4月17日は震災から3ヶ月という節目の日であり、記事数が増えるのではないかという予測から17日からの一週間を取り扱うことにする。

### 1-3. 研究方法・調査方法

震災当時は、現在のようなスマートフォンといった、電源とインターネットの環境さえ整えば情報を収集、拡散できるような媒体がなかったことは明らかである。こうした中で、研究対象としてメディア媒体を挙げるとするならば、テレビ・ラジオ・新聞の三つではないだろうか。より最新の情報をリアルタイムで届けるという点では、テレビ、ラジオが圧倒的優位に立つ。一方で、放送できる時間は限られる上記2媒体に比べ、複数の記事を一度に、そして継続的に発信することができるという点は、新聞にしかない長所である。そこで、地方新聞として被災地である兵庫県、及び神戸市に深く根付いている神戸新聞と、全国紙の一紙である朝日新聞の大阪版（兵庫面を含む）を本論において研究対象として取り上げる。以上二紙の阪神・淡路大震災について書かれた記事を分析する。記事には、被害の様子や、救助活動について、また震災から生じた制度的な問題についての報道など、その性質や内容は多岐に渡る。本論では、記者による社説や、被災者の声や生活を文章にした記事に着目する。こうした記事には、単に情報、事実を伝えるだけでなく、それを書く記者の目線が捉えた実情を文章によって伝達される。記事の内容だけでなく、記者の目線、どのように現場へ足を運び、どのような背景があったのかを考察したい。そのため、行政庁が発表した内容や当該期間に行われていた兵庫地方選の記事については収集データから除くものとした。

また、震災発生からの時系列を一定期間に区切り、そこで期間ごとに記事を分析することで、発生直後だけではなく、その後の被災地についての報道について差があるのか、またその差はどのようなものであるかということ考察したい。

## 2. 二紙の比較

### 2.1 比較方法

1995年4月17日から同年4月23日の一週間を期間として、神戸新聞と朝日新聞を比較する。神戸新聞の記事については、当時の記事を集積したデータベースが無い為、神戸市立中央図書館保存のマイクロフィルムを参照した。朝日新聞の記事については、データベース聞蔵IIにアクセスし、「震災 or 避難 or 被災 or 地震 or 復興」のキーワード検索をかけた後、必要となる記事を取り上げた。なお、検索範囲を、大阪発行社に限定し、本紙及び地域面を含むものとして参照した。また既に述べた通り、本論では記者による社説や、被災者の声や生活を文章にした記事に着目するため、行政庁が発表した情報や当該期間に行われた兵庫県地方選についての記事については除く。

集めた記事の整理方法として、社会科学研究全般でよく用いられる KJ 法を採用した。各紙ごとに集めた新聞記事を類似したもので分類し、その特徴ごとにコードをつけた。さらにそのコードをサブカテゴリーにまとめ、最終的に数個のカテゴリーに集約した。プロセスの限界としては、神戸新聞のマイクロフィルムについては、保存状態によって文字の判別ができないものがあった。また、データベースにおいては、著作権の関係上、閲覧ができない記事があり、それらはデータに取り入れることができなかった。

## 2.2 比較結果

神戸新聞は、合計 80 の記事を 69 個のコード、朝日新聞は、合計 77 の記事を 66 個のコードに振り分けた。さらに、各コードを神戸新聞は 18 個、朝日新聞は 16 個のサブカテゴリーに分類した。最終的に神戸新聞は 3 個、朝日新聞は 2 個のカテゴリーに分類した。表 1.2 が神戸新聞を整理したもので、表 3.4 が朝日新聞を整理したものとなる。

| 表1 神戸新聞  |         |   |   |
|----------|---------|---|---|
| カテゴリー    | サブカテゴリー | コード                                       | データの一部  |
| 復興に関する記事 | 街への思い   | 元の街に帰りがっている                               | 「生きる」8 カンバスに残った街 青写真(1995.4.19)   |
|          |         | 離れがたい仕事への思い                               | 「生きる」7 カンバスに残った街 仕事への思い(1995.4.18)  |
|          |         | 駅前ビルの立ち遅れに期待と不安感                          | 都市開発問う駅前ビル 立ち遅れに複雑な思い(1995.4.19)  |
|          |         | 町が変わることへの不安                               | 特性生かした再開を 住み慣れた街に愛着(1995.4.18)  |
|          | 復興まちづくり | 住み慣れた街での生活再建への喜び                          | 地元の土地借り仮設住宅・店舗 入居決まり新たな一歩(1995.4.18)  |
|          |         | まちづくりに意見集約                                | 優しい町 自らの手で(1995.4.17)   |
|          |         | 三宮の官民協力                                   | 神戸の玄関口再構築 求められる"官民"協力(1995.4.22)  |
|          |         | まちづくりの正念場                                 | 正念場のまちづくり 調和するか市との計画(1995.4.21)   |
|          |         | 「復興委員会」発足                                 | 三宮センター街 新しい"神戸の顔"へ 商店主ら団結 復興委員会を発足(1995.4.22)                                       |
|          |         | 市民の防災意識                                   | 社説 市民の防災意識は変わった(1995.4.17)  |
|          |         | 新幹線の振動                                    | 新幹線きょう速度アップ 被災家屋に振動追い打ち(1995.4.22)  |
|          | 記録保存    | 復興への要望                                    | 社説 復興へ国は責任を果たせ(1995.4.20)<br>社説 都市の復興に環境の視点を(1995.4.22)                             |
|          |         | 震災の諸記録を集め残したい                             | 社説 大震災の記録残したい(1995.4.18)  |
|          |         | 証言集出版                                     | 被災市民の証言集出版 インタビューで「明日の町へ」(1995.4.20)  |
|          |         | 後世に残すために写生                                | 「生きる」10 カンバスに残った街 がれきの街を後世に鎮魂の写生(1995.4.21)   |
|          | 芸術・文化   | 震災体験を点字冊子に                                | 神戸中央区 点字教室 笑顔の再会(1995.4.19)   |
|          |         | 無傷の野外彫刻                                   | 芝良空さんの野外彫刻 海、山、街で無傷のまま(1995.4.23)   |
|          |         | がれきの展示会                                   | 本当の街づくりをガレキで考えよう 灘の画廊店主(1995.4.21)  |
|          |         | 文化財保護                                     | 社説 地下の遺物を邪魔者にするな(1995.4.21)   |
|          |         | 復興の思いを絵に                                  | ペニヤ絵に復興の思い 兵庫の写真スタジオ跡地(1995.4.20)   |
|          |         | 遺作展                                       | 「生きる」9 カンバスに残った街 遺作展に消えた街重ね(1995.4.20)  |
|          |         | 復興コンサート                                   | 被災の音楽家ら共演 響け！復興のハーモニー(1995.4.17)<br>障がい者らの「楽団あぶあぶあ」など 復興支援へ演奏会オリジナル含む20曲(1995.4.21) |
|          |         | 復活祭                                       | 神戸の再生にリズム合わせ 中央区の仮設礼拝堂(1995.4.17)   |
|          |         | 復興祭                                       | 兵庫 連南地区で復興祭(1995.4.17)  |
|          |         | リレーカーニバル開催                                | きょう兵庫リレーカーニバル開幕 復興激励へ好レース期待(1995.4.22)  |
|          | 再開      | 営業再開                                      | 被災商店街に復興のつち音 長田・菅原市場に大看板(1995.4.19)   |
|          |         |   | この街、この場所 いつものにぎわい そごう神戸店再開(1995.4.17)   |
|          |         |   | 須磨浦公園-須磨間 きょうから運転再開 山陽電車(1995.4.18)<br>お魚見物に心もなごむ 須磨水族館93日ぶり再開(1995.4.20)           |
|          |         | 傾いたビルで工場稼働                                | 傾いたビルに力強い機械音 長田の町工場 懸命の操業(1995.4.18)  |
|          | ビル仮復旧   | 交通センタービル仮復旧 震災以来3ヶ月ぶり「さんちか」と結ぶ(1995.4.20) |   |
|          | 神戸港     | 神戸港の回復を                                   | 社説 港の機能回復さらに加速を(1995.4.23)  |
|          |         | 荷役業者の不満                                   | 神戸港の荷役業者 復旧融資の弾力運用要望 罹災証明なく制度の対象外(1995.4.23)  |
|          |         | 仮設埠頭建設                                    | 4カ所に仮設埠頭 六甲アイランド南など 10月末までに完成(1995.4.18)  |
|          | 教育      | 新採用教員の現場実態を研修                             | 教育現場 被災者の生活から学ぶ 神戸で新採用教員研修(1995.4.18)   |
|          |         | 週5日制と震災                                   | 悩み深い被災地の学校 週5日制拡大に「震災ソフト」(1995.4.22)  |
|          | 子どもの活躍  | 小学生が朗読詩大賞受賞                               | つづった体験「朗読詩大賞」 じしんがきてもはるくるもん(1995.4.21)  |
|          |         | 小学生がまちづくり案策定                              | 長田御蔵小 6年生がまちづくり案 御菅地区 災害に強い下町描く(1995.4.20)  |
|          |         | 少年野球大会開催                                  | ふさがちな児童に笑顔を 震災で開催危ぶまれた神戸少年野球 きょうプレー(1995.4.23)                                      |

| 表2 神戸新聞        |           |              |  |
|----------------|-----------|--------------|--|
| カテゴリー          | サブカテゴリー   | コード          | データの一部   |
| 震災発生時と直後に関する記事 | 発生当時の医療体制 | 病棟崩壊         | 大震災 私たちのそれから 59病棟崩壊(1995.4.19)   |
|                |           | 医薬品不足        | 大震災 私たちのそれから 62医療班(1995.4.22)  |
|                |           | 救護活動         | 大震災 私たちのそれから 60救護活動(1995.4.20)   |
|                |           | 安置所          | 大震災 私たちのそれから 63安置所(1995.4.23)  |
|                |           | 全国から救護班      | 大震災 私たちのそれから 61頼みの綱(1995.4.21)   |
|                | 体制        | 井戸が衛生維持に大活躍  | 震災、井戸に救われる 関東大震災、戦争の教訓生きた(1995.4.18)   |
|                |           | サイレン有無の影響    | クローズアップ 緊急医療 震災で分かったこと(1995.4.23)  |
|                |           | 物資の配送が困難     | 大震災 私たちのそれから 58 物資あれど…(1995.4.18)  |
|                | 地震について    | 地震原因         | 「大震災 地下で何が」9(1995.4.18)  |
|                |           |              | 「大震災 地下で何が」11(1995.4.20)   |
| 被災生活に関する記事     | 関連する法律問題  | 被災マンションの再建問題 | 社説 マンション再建に壁超えたが(1995.4.19)  |
|                |           | 罹災証明         | "一部損壊"判定にズレ 税軽減措置で税務署対応変化 申告できず被災者困惑(1995.4.22)  |
|                |           | 避難場生活と融資待ち   | 避難所 生活再建 遠い道のり(1995.4.17)  |
|                |           | 震災失業者        | あきらめないで 震災失業者 雇用保険給付ok(1995.4.17)  |
|                |           | 活動続行へ出資募集    | 私たちのオーナーになって 被災地の音楽家 活動続行へ出資募る(1995.4.20)  |
|                |           | 震災破産         | "震災破産"が急増 神戸地裁管内 先月末まで30件(1995.4.21)   |
|                |           | 賠償請求         | 長田の大火 「工場の老朽塙原因」電柱倒し漏電出火 製粉会社に賠償請求(1995.4.20)  |
|                |           | 震災関係手形       | 震災関係手形の特例措置 解除時期の検討開始(1995.4.22)   |
|                | 仮設住宅      | 仮設住宅に独居高齢者   | 仮設住宅 独居高齢者ら 地域から離され(1995.4.17)   |
|                |           | 仮設住宅ツアー検討    | 入居低迷の北区鹿の子台仮設住宅 県と市 現地ツアー検討(1995.4.22)   |
|                |           | 仮設住宅の地域格差    | 高齢者・障害者向け 仮設住宅に格差くっきり(1995.4.23)   |
|                | 避難所       | かしわ餅が避難所に    | 避難者や児童ら かしわ餅に舌鼓(1995.4.22)   |
|                |           | 無料移動上映会      | 県映画センター 義援金やボランティア 全国の支援受け無料移動上映会(1995.4.20)   |
|                | ボランティア    | ボランティア寄贈     | 五月人形飾って元気に(1995.4.21)  |
|                |           | ボランティア活動     | バナナたたき売りも 神戸でチャリティー 安来節と大道芸(1995.4.23)   |
|                |           | 他地域からの支援     | 自立の応援します 東京の電機店主が神戸に出張(1995.4.17)  |
|                | 震災後の諸問題   | 工場閉鎖で異動へ     | 工場閉鎖…さらば神戸 被災の日本製粉・神戸(1995.4.18)   |
|                |           | 空白地帯         | まちの再生 復興への動き④3ヶ月…まずは住む家を 生活条件ごとに協議へ(1995.4.20)   |
|                |           | 営業制限地域       | 営業制限地域内 再建あきらめん 被災パチンコ店に風営法の壁(1995.4.19)   |
|                |           | 被災企業         | 税制支援措置 減・免税や特別償却の活用を(1995.4.22)<br>役員報酬30%削減 そごうグループ 神戸店の被害大きく(1995.4.22)<br>ダイエー初の赤字 消費不況 震災追い討ち(1995.4.22) |
|                | アンケート     | 独自アンケート      | 仮設住宅入居者 7割「転出めどなし」 防音などに問題点100世帯アンケート 半数が体に不調(1995.4.19)   |
|                |           |              | 阪神大震災から3ヶ月 入居100世帯に初のアンケート調査(1995.4.19)  |
|                | 個人を特集     | 追悼           | 忘れぬ 鎮魂 阪神淡路大震災(1995.4.22)  |
|                |           |              | 震災から3ヶ月 命輝く すくすく勇志くん(1995.4.17)  |
|                |           |              | 頑張れ！瓦葺き職人(1995.4.23)   |
|                | 奮闘        | 奮闘           | 在日一世の奮闘に期待(1995.4.20)  |

| 表3 朝日新聞  |            |  |  |
|----------|------------|--|--|
| カテゴリ     | サブカテゴリ     | コード                                    | データの一部   |
| 復興に関する記事 | 再開         | 営業再開                                   | そごう神戸店、震災から3カ月ぶり再開(1995.4.17)<br>須磨水族園、営業を再開 震災から3カ月ぶり(1995.4.20)<br>掃除 (震災の街:81) 阪神大震災(1995.4.18) |
|          |            | 学校再開                                   | 阪神大震災で関学が2週間遅れの入学式(1995.4.17)  |
|          |            | 道場再開                                   | 武庫之浦流座敷前 (夢中人たち) (1995.4.18)   |
|          |            | 地元に残って職場再建                             | 震災で失った“職場”再建へ 神戸の「いかり共同作業所」(1995.4.18)   |
|          | 復旧、工事完了    | 上水道復旧                                  | 神戸市全域で上水道が復旧(1995.4.18)  |
|          |            | 修復工事                                   | 神戸・生田の神様、仮殿へ避難 阪神大震災被災で修復工事(1995.4.19)   |
|          |            | 修理作業                                   | 阪神大震災で傷んだ壁に看板募集中(1995.4.20)  |
|          |            | 被災学生向け寮完成                              | 間伐材使い山小屋風 被災学生向け寮完成(1995.4.22)   |
|          | 記録保存       | 地震の教訓を冊子に                              | 伊丹の主婦ら「地震の備え」冊子に 阪神大震災の被災者調査で(1995.4.20)   |
|          |            | 警察署員の体験記発行                             | 震災救出体験記「絆」を発行 神戸市生田署員の手記まとめ(1995.4.19)   |
|          | 子どもの活躍     | 子どもに復興フォーラム                            | 子供の復興フォーラム 地球ウォッチングクラブ・にしのみや(1995.4.23)  |
|          |            | 支援中学にお礼の修学旅行                           | 震災支援のお礼に長野の2中学へ修学旅行(1995.4.18)   |
|          |            | 高校で体験文集                                | 阪神大震災の体験を文集「1・17」に 県立芦屋南高校が作る(1995.4.22)   |
|          |            | 小学生が50年後にメッセージ                         | 大震災のこと伝えたい(1995.4.17)  |
|          | 元に戻った      | 震災前の姿に                                 | ミニトレインが運転再開 淡路島・おのころ愛ランド公園(1995.4.22)  |
|          |            | 被災した植物                                 | 折れた八重桜、震災に負けず満開 神戸・生田神社(1995.4.22)   |
|          |            |  | 生き延びて花 葉ボタン、阪神大震災で植え替えられず(1995.4.19)   |
|          |            |  | 阪神大震災で被災した木に緑の新芽(1995.4.22)  |
|          | アルバムが戻ってきた | 思い出のアルバム戻った 震災でがれきに埋もれた成長記録(1995.4.21) |  |
|          | 文化・スポーツ    | 被災地で復活祭                                | まちの復活願い 神戸栄光教会でメサイア演奏会(1995.4.17)  |
|          |            | 復興祭                                    | 震災被災地で龍の舞 復興祈り祭りに花(1995.4.17)  |
|          |            | 特産品の展示会                                | 「靴の街」ここまで復興 長田の業者団体が震災後初の展示会(1995.4.18)  |
|          |            | カッターレース開催                              | 「こんな時こそ」開催へ 神戸港カッターレース(1995.4.21)  |
|          |            | 記念イベント開催                               | 阪神大震災から100日 27日に兵庫県公館で県民の集い(1995.4.22)   |
|          |            | 震災鎮魂組曲制作                               | 大震災犠牲者への鎮魂組曲を制作へ 神戸市役所センター合唱団(1995.4.20)   |
|          | 追悼         | 合同自然葬                                  | 被災者の国籍・宗教問わず「合同自然葬」(1995.4.21)   |
|          |            | 追悼コンサート                                | 両親が亡くなった娘へ 神戸で震災追悼コンサート開く(1995.4.17)   |
|          |            | 遺品整理                                   | 法要へ初孫の遺品整える 阪神大震災からまもなく100日(1995.4.23)   |
|          | 被災者の活躍     | 被災者がスポーツで活躍                            | 報徳の駅伝走者、社会人デビュー(1995.4.17)   |
|          |            | 被災体験を演劇に                               | 「家族の復興」脚本に 神戸の高校生25人が無料上演(1995.4.22)   |
|          | まちづくり      | 復興策への住民参加                              | 「新しい街」どう描く(1995.4.17)  |
|          |            | 住民が意見集約                                | 再生させろ私の街 阪神西宮南地区、24日に連絡協議会結成(1995.4.21)  |
|          |            | 復興計画                                   | 「防災都市」目指す復興計画(1995.4.17)   |
|          | 防災に向けて     | 専門家会議開催                                | 阪神大震災復興へ市民の知恵を 医師や学者らが22日研究会(1995.4.22)  |
|          |            | 地震の原因                                  | 見えない脅威「活断層」探査(1995.4.17)   |

| 表4 朝日新聞    |  |   |  |  |
|------------|--|---|--|--|
| カテゴリ       | サブカテゴリ                                   | コード                                     | データの一部                                   |  |
| 被災生活に関する記事 | ボランティア                                   | 安否確認のボランティア                             | 佐藤あつ子さん 初恋の人探します社代表(1995.4.17)           |  |
|            |  | ボランティアの体制                               | ボランティア活動支える動き(1995.4.17)                 |  |
|            |  | ボランティアの声                                | ボランティア700人を調査(1995.4.17)                 |  |
|            |  | 他国とボランティア比較                             | 米国のボランティアと比べて(1995.4.17)                 |  |
|            |  | ボランティアに感謝                               | 被災地のボランティア、音楽で骨休め 西宮でコンサート(1995.4.17)    |  |
|            |  | ボランティア活動内容                              | 朝日ボランティア基地・19日(1995.4.19)                |  |
|            |  |   | 阪神大震災の災害遺児らを支えて下さい あしなが学生募金(1995.4.23)   |  |
|            |  |   | 折り紙楽し、心も“復興” 大阪の講師、西宮で無料指導(1995.4.17)    |  |
|            |  |   | お絵かきで阪神大震災の被災児を激励(1995.4.23)             |  |
|            |  | 他地域から慰問・激励                              | 「神戸わんぱくまつり」に来てね チューリップ配ってPR(1995.4.21)   |  |
|            | 大人も子供も猿回しに爆笑 西宮で阪神大震災の被災者を慰問(1995.4.23)  |   |  |  |
|            | 阪神大震災避難所の小学校を訪問 韓国の洪一植・高麗大学総長(1995.4.22) |   |  |  |
|            | 避難所と仮設住宅                                 | 避難所閉鎖                                   | 避難住民、仮設住宅や自宅へ 明石と川西の全避難所閉鎖で(1995.4.17)   |  |
|            |  | 避難所解消の遅れ                                | 避難所解消に遅れ 仮設への転居、神戸は夏以降 阪神大震災(1995.4.17)  |  |
|            |  | 避難所生活                                   | 疲労回復は朝の体操で 阪神大震災から3カ月(1995.4.17)         |  |
|            |  |   | 保冷庫設置で安心です 阪神大震災避難所(1995.4.22)           |  |
|            |  | 仮設住宅未入居                                 | 仮設住宅の未入居が約3割 西宮の避難住民有志が調査(1995.4.20)     |  |
|            | 仮設住居への入居辞退                               | この地、離れられない 阪神大震災3カ月(1995.4.18)          |  |  |
|            | 経営                                       | 漁業不振                                    | 水揚げ量は増加、水揚げ額は震災で不振 但馬海岸のズワイガニ(1995.4.21) |  |
|            |  | 事業再開も前途多難                               | 神戸のデパート、前途多難の再開 品ぞろえ・雇用…(1995.4.21)      |  |
|            |  | 営業再開の目処が立たない                            | 美術館は閉館続き、再開めど立たず 復旧工事遅れや交通事情で(1995.4.20) |  |
|            |  | 被災企業の復興計画                               | ダイエー、2千—3千人出向へ 被災復興へ3カ年計画(1995.4.22)     |  |
|            |  | 事業再開企業の割合                               | 阪神大震災被災企業の7.5%、神戸で事業再開(1995.4.18)        |  |
|            | 労働者                                      | 被災企業の春闘                                 | 戦後初のベアゼロ 大丸が妥結(1995.4.22)                |  |
|            |  | 被災企業の春闘                                 | 6700円で阪神電気鉄道、ベア妥結 震災で独自交渉(1995.4.22)     |  |
|            |  | 神戸港労使協調                                 | 24時間荷役で雇用の回復を図る ミナト神戸復興へ労使協調(1995.4.18)  |  |
|            |  | 災害関連死                                   | 早朝にトラックと衝突し死亡(1995.4.18)                 |  |
|            |  | 労災死                                     | 阪神大震災の労災死25人 兵庫労働基準局がまとめ(1995.4.19)      |  |
|            | 震災後の諸問題                                  | 震災後の病状                                  | 震災で軽快 症例分析し治療法探る(1995.4.20)              |  |
|            |  | 医療の現状と課題                                | 震災地の医療で懇談 神戸で県保険医協会(1995.4.18)           |  |
|            |  | 震災関連犯罪                                  | かわら補修と称し手付金だまし取る(1995.4.19)              |  |
|            |  | 震災前活動のボランティア減少                          | 地元ボランティア減った 震災前の半分の市も 応援組頼り(1995.4.19)   |  |
|            |  | 法律問題                                    | 壊れた文化住宅をマンションに(1995.4.20)                |  |
|            | 個人を特集                                    | がれき処理が続く                                | いつまで続く、阪神大震災のがれき野焼き(1995.4.19)           |  |
|            |  | ミニコミ紙の創刊と廃刊                             | 今も続く長い列 阪神大震災から3ヵ月(1995.4.17)            |  |
|            |  | 障がい者の暮らしを調査                             | ミニコミ紙も様変わり 視点変え創刊も(1995.4.21)            |  |
|            | 被災の銭湯                                    | 車いすで阪神大震災被災の神戸を歩き、調査 大津の宮本さん(1995.4.18) |  |  |
|            |  |   |  | 神戸の銭湯がピンチ 震災で建物は壊れ、街去ったなじみ客(1995.4.23) |

### 2.3 考察

神戸新聞にのみ現れた「震災発生時と直後に関する記事」というカテゴリーについては、当該期間に神戸新聞が毎日、当時の医療体制についての特集コーナーを作り記事としていたことが要因として考えられる。二紙ともに地震の原因やその他震災発生当時に起きた問題などについても取り上げる記事があり、発生から3ヶ月立ち、震災の検証というフェーズに入っていることが読み取れる。

カテゴリー別の記事数に関して、二紙とも「復興に関する記事」が約半数を占めていることがわかる。ところが、同数程度の記事をサブカテゴリーに分類すると、違いが現れる。神戸新聞には、被災者による「まちづくり」、「街への思い」、「芸術・文化」の記事が多い。カテゴリー内では、半数を超える数を占めている。「まちづくり」、「街への思い」には、復興のための街の再生に地元住民が参加している記事や、地元の街への思い入れが強く、街に留まることやあるいは離れざるを得ないといったことへの気持ちを描く記事なども見られる。朝日新聞においても、住民が街の復興計画に参加しているということを報じる記事はあるが、思い入れや気持ちを描く記事は見られなかった。

神戸新聞のこうした特徴から考えられるのは、阪神・淡路大震災に対する「当事者意識」というものが強いということである。神戸新聞では、震災によって街が壊され、いまだに避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされている人々や、住んでいた家や仕事場に帰って来たがこれから復興に向けて取り組まなければならない人々といった被災者が読者の大半を占める。その被災者と同じく被災した地元紙にとっては、彼らと同じくこれから復興に向けて取り組まなければならないという意識があったのではないだろうか。

また、神戸新聞の「芸術・文化」の記事では、地域で復興祭が行われるといったことだけでなく、被災者となった神戸の芸術家が復興の一助を担う活躍をしているといった内容の記事も多かった。一方で、朝日新聞では「元に戻った」というサブカテゴリー内で被災した植物を特集する記事が見られた。両者は同様に、復興の兆しを見せるものとして紹介されているが、神戸新聞は個人の活躍にフォーカスし、朝日新聞は植物の再生などにフォーカスしている。ここにも地方紙の「当事者意識」が現れていると考えられる。被災者でもある芸術家個人を特集することで、単なる芸術活動、文化活動の紹介ではなく、ともに震災を乗り越えるために頑張る「仲間の活躍」として描くことで、被災地の読者を元気付ける意図が見られる。全国紙である朝日新聞では、被災者にフォーカスするのではなく、植物というより象徴的なものに焦点を当てることで、被災者の具体的な生活から復興の様子を見せるのではなく、非被災地である他の関西圏の読者に向けて、抽象的に復興や再生を示唆することができるのではないだろうか。

そして二紙の最大の違いとして、「ボランティア」に関する記事が挙げられる。神戸新聞では、「被災生活に関する記事」のカテゴリー内の一つとして、ボランティア活動の内容が

数個紹介されるに留まっている。一方で、朝日新聞では、非被災地からのボランティア活動の内容だけでなく、海外のボランティアとの比較、体制、被災者ではなくボランティア側の声など内容が多岐に渡る。非被災地側からの目線は、神戸新聞にはなく朝日新聞にはあるものと言える。神戸新聞では、「被災者である“自分たち”が復興に向けて奮闘する」という地元住民と同じローカルな目線に立っているのに対して、朝日新聞では、ボランティアの活躍を含めることで、被災地に向けて発信すると同時に非被災地に向けても発信するという少し高い視座に立っている。

このように、同じく関西地方を拠点に発信する二紙にも若干のズレが生じていることがわかる。地方紙に比べ、全国紙の方が、被災者の文化的活動に関する生活情報がやや薄いという点、そして地方紙にある「当事者意識」というものが、先行研究に対しての問いである、温度差を生じさせたものではないかと考えられる。

とはいえ、メディアである以上、日常的な取材同様、客観的な視点での報道が求められていたことも事実ではある。三木(1996)では、当時の神戸新聞論説委員長として震災報道のあり方を模索していく中で、神戸新聞の記者たちが、「報道者の職業意識と、純粋な人間本来の感情との間のさまざまな葛藤」(三木 1996:17)にあったことについて触れている。

### 3. 20年後の報道

#### 3.1 比較方法

では、前章で確認した温度差やズレは、現在の神戸にどのように結びついているのだろうか。本論では、震災発生から20年後の2015年1月17日の二紙を同様に比較することで、温度差が継承されているのかということについて検証する。2011年に発生した東日本大震災を踏まえて、二紙は阪神・淡路大震災をどのように捉えているかという点にも着目したく、当年を比較対象として設定した。記事は二紙ともに、データベース内から縮小版を参照し、阪神・淡路大震災に関連する記事を取り上げた。記事の整理方法も前章と同様にKJ法を用いることとした。

#### 3.2 比較結果

神戸新聞は、合計34の記事を22個のコード、朝日新聞は、合計21の記事を17個のコードに振り分けた。さらに、各コードを神戸新聞は5個、朝日新聞は4個のサブカテゴリーに分類した。最終的に二紙ともに2個のカテゴリーに分類した。以下が分類した表である。表5が神戸新聞、表6が朝日新聞である。

| 表5 神戸新聞   |            |                |  |  |                                 |
|-----------|------------|----------------|--|--|---------------------------------|
| カテゴリー     | サブカテゴリー    | コード            | データの一部                                       |  |                                 |
| 震災の記憶     | いかに次代につなぐか | 継承への課題         | 阪神・淡路大震災 きょう20年 「1・17」共有に課題                  |  |                                 |
|           |            | 学んだことを伝えていく    | 災害ボランティアでフォーラム 「行きたい」意思 大事に                  |  |                                 |
|           |            | 教訓を生かすように提言    | 社説 命を守る 教訓生かす誓いを新たに                          |  |                                 |
|           |            | 当時の経験を講演       | 1・17の経験語り継ぐ 関電神戸支店 社員が現場の様子講演                |  |                                 |
|           |            | 当時記録を公開        | 長田の主婦 東京で写真展<br>震災資料 公開始まる                   |  |                                 |
|           |            | 子どもの心のケアの重要性   | 震災20年 次代へ 笑顔になるために 子どもの心のケア                  |  |                                 |
|           | 20年前を回顧    | 当時の経験から学ぶ      | 95年その時 尼崎北高監督 今知る 人の強さと優しさ                   |  |                                 |
|           |            | 震災関連の詩作        | あの日からの詩 文芸欄入選作でたどる20年 どこにも届かぬ声に耳傾け           |  |                                 |
|           |            | 当時の経験を講演       | 復興描いた作家が講演                                   |  |                                 |
|           |            | 被災地への思い インタビュー | 神戸で「真さん」ロケ 山田洋次監督 「ご苦労さま」の思い今も               |  |                                 |
|           | 追悼         | 異国で逝った息子を追悼    | 歩む 君の分まで 豪州・ネスさん夫婦 10年ぶり来神                   |  |                                 |
|           |            |                | 遺族の特集  | 阪神・淡路大震災 1・17追悼の朝 20年 満ちる祈り<br>悲しみ越え 語り継ぐ 防災活動「一番の供養に」<br>見守って これから 防災科卒業、1児の親に<br>今年成人式、「兄の分まで」                       |                                 |
|           |            |                | 追悼行事   | ろうそく118本「生」ともす<br>6434本の「思い」 いたみ・昆陽池で追悼行事<br>早期臨時便 満員に 神戸・地下鉄<br>ひょうご安全の日のつどい 追悼式典 県民のこトバ<br>ひょうご安全の日のつどい 追悼式典 遺族代表の言葉 |                                 |
|           |            | 神戸大学           | 17日通信 神戸大遺族の奇跡 息子、娘自慢 心ゆくまで<br>神戸大で遺族ら200人追悼 |  |                                 |
|           |            | 過去の記事の特集       | これからも共に 阪神・淡路大震災 あの日から20年<br>編集者メッセージ        |  |                                 |
|           |            | 東日本からの追悼       | 東日本被災地でも黙とう 岩手・陸前高田「希望の灯り」前で                 |  |                                 |
|           |            | 他災害の被災者が追悼     | 東北、中越「思いは同じ」 被災者、神戸で祈り                       |  |                                 |
|           |            | 震災からの復興        | 経済   | 復興支援や役割考える   | 復興支援や役割考える 神戸で交流会 コープこうべ 日生協と共催 |
|           |            |                |  | 検証シンポジウム   | 県中小企業家同好会が検証シンポ 「経営者の覚悟問われた」    |
|           | 経済停滞の20年   |                |  | 被災地経済 停滞の20年 震災、借金に不況追い打ち  |                                 |
|           | 復興支援       |                | スポーツで復興支援                                    | 阪神・淡路大震災20年 1・17 チャリティーマッチ 教訓を刻み未来に伝える<br>カズら"お宝"で復興支援<br>「がんばろう神戸」ユニフォーム復刻  |                                 |
| 東日本への復興支援 |            |                | 神戸から歌声 元気届け                                  |  |                                 |

| 表6 朝日新聞  |                                      |                 |   |
|----------|--------------------------------------|-----------------|---|
| カテゴリー    | サブカテゴリー                              | コード             | データの一部  |
| 震災の記憶    | いかに次代につなぐか                           | 21年への決意         | 伝える、次世代へ 忘れない、横断幕に決意 阪神大震災20年   |
|          |                                      | 風化させずに教訓        | <視点>教訓に向き合ってきたか   |
|          |                                      | 備蓄食料の紹介         | (きりとトレンド) 備蓄食料 普段から食べて買い足す  |
|          |                                      | 防災意識            | (声) 阪神大震災から20年 無電柱化と井戸、整備進めて  |
|          |                                      | 風化させないためにボランティア | (阪神大震災20年) 野球できる喜び忘れない 発生の年、選抜8強の神港学園                                 |
|          | 20年前を回顧                              | 花時計             | 大きく絆の文字 震災20年を前に花時計模様替え   |
|          |                                      | 被災地で生まれた子どもたち   | 20歳、支えていく番 阪神大震災20年   |
|          |                                      | 当時の被害           | みらいの大人たちへ 知る、阪神・淡路大震災20年  |
|          |                                      | 被災地への思い インタビュー  | 地震は来る、現実見つめて 作家・高嶋哲夫さん 阪神大震災20年<br>(阪神大震災20年) しっかりと、今を生きていく 指揮者・佐渡裕さん |
|          |                                      | 小学生が発行の新聞       | 小野柄小学校避難所新聞号外 阪神大震災20年  |
|          | 追悼                                   | 避難所の子どもが描いた絵    | 不安が映る子どもの絵 阪神大震災直後に描いた50枚、西宮で公開                                       |
|          |                                      | 追悼行事            | 20年、光がある 阪神・淡路大震災、きょう追悼式  |
|          |                                      |                 | 祈る、あすへ 東遊園地に1万4000人 阪神・淡路大震災20年                                       |
|          |                                      |                 | 89の鎮魂 西宮・安井地区、犠牲者数と同じ雪地藏 阪神大震災20年                                     |
|          |                                      | 遺族の特集           | 祈り、各地で 阪神大震災20年<br>阪神大震災で殉職の父と同じ道、広島で 伊丹署・辻さんの長男、昌直さん                 |
| 東日本からの追悼 | 「復興へ一緒に歩んでいきたい」 3・11被災地から悼む 阪神大震災20年 |                 |   |
| 尽力者を追悼   | 復興の遺志、受け継いで 黒田さん・山田さんら悼む 阪神大震災20年    |                 |   |
| 震災からの復興  | 経済                                   | 企業の災害対策         | 薬配達、災害時も止めない 物流拠点に燃料を備蓄 メディバルHD                                       |
|          |                                      | 被災直後仕込んだ古酒      | (阪神大震災20年) 被災直後仕込んだ古酒 神戸・灘「沢の鶴」50本即日完売                                |

### 3.3 考察

二紙の共通点として、20年前の被災生活や当時の思いについての記事やこの先後世に伝えていく重要性についての記事が同数程度見られた。20年前にどのような被害があったのか、当時被災者となった人々はどのような気持ちになっていたのかということをも改めて紹介し、その教訓を次の災害へと役立てる為にも、継承していく必要があることを提示している。またその継承における問題点や課題についても指摘がなされている。すなわち、風化をさせずに、残された教訓をいかに活かすのかということである。この点については、二紙ともに見られる論調であり、被災地と非被災地による違いは見られなかった。

一方で、朝日新聞にはなく、神戸新聞に特に多く見られたサブカテゴリーおよびコードがある。一つ目は、「追悼」のサブカテゴリー内にある遺族の特集記事である。残された遺族が震災で犠牲になった故人とのエピソードやその後の20年について描かれている。この差が生まれた要因として、遺族の20年というものが、震災後、時間が経つにつれて非被災地

では報道されなくなった、被災地における“日常性”を持つ情報の延長線上にあるものであるからと考えられる。被災地にとって、震災発生から20年という数字はあくまで、区切りに過ぎず、その間も震災は被災者から離れることなく、日常的に向き合ってきたものである。遺族にとっても、犠牲者の存在は20年間忘れることなく、向き合い続けたものであり、あくまで、20年という区切りの良い数字から特集されたに過ぎず、これから先も向き合い続けていくことは明らかである。すなわち、遺族の故人に対する思いという記事は、震災からの20年分の“日常”を集約したものであると考えられる。“日常性”を持つ情報は、非被災地では求められず、被災地において求められてきたものであった為に、その“日常”を集約した記事については、地方紙である神戸新聞に多く掲載されることとなったのである。

二つ目に、過去の自社記事を集めたものである。これは、「あの日から20年これからも共に」と題して、震災発生直後から2015年までの間に、神戸新聞が震災についてどのように報道してきたのかを、過去の記事を取り上げて紹介している。この特集に際し、編集局長の言葉も添えられている。

21回目の朝が来ました。あの日と同じように底冷えのする朝です。

阪神・淡路大震災の発生直後を振り返ってみると、避難場所や食べ物の確保、そして時間を経て仕事や暮らしの再建、街の再生と、初めてのことがばかりでした。交通網や水道、電気、ガスなどの機能不全は続いています。心の整理がつかないまま、課題は次々と襲いかかって来ました。

被災地にいる者だけではなく、外から手を差し伸べてくれた人を含め、みんなが手探り状態で闘い続けていました。

神戸新聞も同じでした。神戸・三宮の本社が地震で壊滅状態となり、仮事務所での取材活動、京都新聞の協力を得ての紙面制作…。ページ数がなかなか戻らない状況の中でも、もがきながら取材し、紙面を作ってきました。

この特集紙面に紹介している震災関係の連載企画、記事はほんの一部です。これらは、被災地が行きつ戻りつしながら歩んできた道のりの記録です。

あの日から全てのことが大きく変わりました。読者の皆さんとともに私たちが積み重ねて来た記事や提言が、将来、起きるであろう大災害に対する備えの一助になることを願ってやみません。(編集局長・田守茂男)(神戸新聞 2015.1.17 朝刊 5面)

神戸新聞も多くの市民と同様に震災を経験し、被災地の新聞社として読者である被災者と共に歩んできたという内容から、ここでも「当事者意識」というものが現れている。「外から手を差し伸べてくれた」、「読者の皆さんとともに」という表現にもあるように、神戸新聞社も一人の被災者であり、読者と同様に復興に向けて様々な協力を得ながら新聞を作ってきたことを示している。そして、被災地の地方紙として情報を発信し続けてきたということが強調されている。この強調からも、前章で指摘した、「当事者意識」は20年経った後も

引き継がれていることが分かる。一方の朝日新聞では、過去の記事を集めたものは見られなかった。

三つ目に、東日本大震災に関連した記事である。両紙共に、東北県において東日本大震災の被災者らが、阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼するといった内容の記事が見られた。しかし、二紙の違いとして、東日本大震災と阪神・淡路大震災の関係性を捉えるアプローチが異なるという点が挙げられる。朝日新聞では、東日本大震災の被災地において阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼するという記事のみが掲載されているに留まる一方で、神戸新聞では阪神・淡路大震災の被災地である神戸から、東日本大震災の被災者を元気づける活動や復興を応援するといった内容の記事が掲載されている。

#### 神戸から歌声 元気づけ 華原朋美さんらコンサート

阪神・淡路大震災 20 年を迎える神戸から、東日本大震災で被災した子どもたちへ元気を届けるチャリティーコンサート「夢と絆」が 16 日、神戸市中央区の神戸国際会館で開かれた。歌手の華原朋美さん（40）、高石ともやさん（73）らが東北へ思いを寄せ、力強い歌声を披露した。

同市長田区の中学校校長会などでつくる「阪神・淡路大震災長田復興コンサート実行委員会」が主催。須磨翔風高校（同市須磨区）和太鼓部や長田高校（同市長田区）音楽部なども出演した。

華原さんは、ピアノの伴奏に合わせ賛美歌「アメイジング・グレイス」を独唱。「今もつらい思いを抱えている被災者がいると思うけれど、生きることには無駄はない」と力を込め、「見上げてごらん夜空の星を」などをしつとりと歌い上げた。

神戸の復興を歌で支援する高石さんも「あの素晴らしい愛をもう一度」などを熱唱した。会場では、高校生らが東北の被災地へ届ける義援金を募った。（田中宏樹）（神戸新聞 2015.1.17 朝刊 36 面）

また、神戸新聞では、神戸に赴いた東日本大震災や新潟県中越地震の被災者らが、阪神・淡路大震災から 20 周年を迎え、追悼行事が行われる中で、自らの被災経験と重ね合わせるといった内容の記事も見られた。

#### 東北、中越「思いは同じ」 被災者、神戸で祈り

東日本大震災と新潟県中越地震の被災者も、神戸で祈りをささげた。復興途上にある古里の姿と重ね合わせ、午前 5 時 46 分、静かに目を閉じた。

三宮の東遊園地には、宮城県名取市の漁師菊地篤也さん（52）の姿があった。東日本大震災で、同市関上地区の自宅が津波に流され、中学 2 年の長女ななみさん＝当時（14）、母とも子さん＝同（67）＝が亡くなった。

家族も家も船も、津波はさらった。「『頑張れ』って言葉が嫌いになった。何を頑張れっ

ていうのか…」

震災2年後、新しい船が完成し、漁に出た。だが、悲しみは癒えない。地元の追悼式にはまだ、足を運べない。

今年、同地区で被災した9人と一緒に初めて神戸を訪れた。時報とともに祈りの瞬間が近づくと、ななみさんの写真を見つめた。こぼれる涙を、何度も手でぬぐう。

黙とうー。

「20年たっても、神戸もおんなじなんだって思った。もっと早く来れば良かった」

そう話す菊地さんの表情は、東遊園地に足を踏み入れる前より少し緩んでいた。

新潟県長岡市山古志からは、6人が神戸市長田区の鷹取商店街を訪れた。2004年の中越地震で、真っ先に支援に駆けつけたのが同商店街の人たちだった。

中越地震当時、中学1年で、自宅が全壊した畔上凌さん(23)は初参加。昨夏から山古志の「復興交流館」で案内スタッフとして働く。「神戸の姿は中越のこれから。ここで感じた空気を地元で伝えていきたい」(上田勇紀、小尾絵生)(神戸新聞2015.1.17夕刊8面)

他の災害の被災者に焦点を当てた記事を掲載したことは、多くが阪神・淡路大震災を経験した神戸新聞の読者に対して、他の災害の被災者も追悼したという事実を単に伝えるものではなかったのではないかと考えられる。遙々神戸に赴き、阪神・淡路大震災の被災者や犠牲者の遺族らと同様に追悼することで、東日本大震災の被災者は、家族を失ったことに対する受け止め方に少し変化が見られた。また、新潟中越地震の被災者は、復興した神戸の街並みや人々を目の当たりにすることで、現在の神戸に故郷の未来の姿を重ね、新たに前向きな気持ちを生んでいる。このような記事は、読者である阪神・淡路大震災の被災者らの復興してきた姿や辛い経験を乗り越えてきた姿によって勇気付けられた、別の災害で被災した人々の存在を伝えるだけでない。勇気づけているという事実を通して、阪神・淡路大震災の被災者たちが復興に向けて過ごしてきた20年間を改めて肯定的に捉え、それは復興という「元に戻す」以上の意義があったことを伝えたかったのではないだろうか。

以上のようにここでも、あくまで阪神・淡路大震災の被災者を主体として活動にフォーカスする地方紙と、阪神・淡路大震災においては非被災者となる東日本大震災の被災者を主体として活動にフォーカスする全国紙という構図が生まれる。同じく、二つの震災が関連した記事ではあるが、地方紙には全国紙には見られないアプローチが存在することが分かる。

#### 4. 温度差の原因

では、その「当時者意識」の有無という大きな違いは何故生まれたのだろうか。

一つ目に考えられるのは、全国紙と地方紙が持つ役割が異なるという点である。これは、松井(2012)の先行研究でも指摘されている通りである。全国紙においては、その購読範囲の広さから、欠け落ちてしまう地元の情報というものが存在する。地方紙は、その欠け落ちた地元の情報をカバーし、読者に提供することで、役割の棲み分けがなされている。よりミ

クロな地元の情報であればあるほど、視座は低く、地域に密着したものとなる。地域に密着したものにこそ「当事者意識」が生まれるのであれば、地方紙には存在し、全国紙には欠け落ちている状態は当然の結果とも言えるのではないだろうか。

二つ目に、所属している記者、編集者の違いという点である。地方の新聞社に所属するということは、その新聞社が販売対象とする地域に密着し続けることを意味する。阪神・淡路大震災における神戸新聞の記者や編集者は、震災前から地方紙として、神戸、あるいは兵庫県という地域の情報を提供し続けてきた。地域の情報を地域の読者に伝える中で、その所属する地域に対して、そこがたとえ自身の出身地でなくとも、一定程度の思い入れを持つものではないだろうか。またその地域を長年取材し続けることで、記者や編集者個人に、自然とその地域についての知識や知見が増えるものである。そしてその新聞社に所属する限りは、その思い入れや知見は記事に影響を与え続けるものである。阪神・淡路大震災の報道において、20年後の2015年の記事にも「当事者意識」が継承されていたことは、以上のことから考えられる。一方で、全国紙は、その名の通り日本全国あるいは海外にも拠点を持っている。一概には言えないが、全国紙の記者や編集者は転勤などで、特定の地域に長期的に定着するケースが少ないことが考えられる。そのため、特定の地域に対して、それほどまでの強い思い入れを持つとは限らないのである。また仮に記者らが、配属期間中にその地域に密着し、愛着を持っていた場合でも、転勤等の理由でその地域を担当していなければ、思い入れや愛着というものは継承されず、記事にも反映されないこととなる。すなわち、地方紙には「当事者意識」を生む土壌がある一方で、全国紙には土壌としてその意識が生まれにくいものであることが考えられる。

## 5. 総括

地方紙と全国紙における温度差というものは、震災発生から3ヶ月の時点では既に存在し、また発生から20年後においても、「当社も阪神・淡路大震災の被災者である」という「当事者意識」の有無からその温度差は継承されていることが見て取れた。一方で、「当事者意識」というものは関係なく、次世代に向けて震災を風化させることないようという、防災、減災への意識を継承の重要性については、両紙に差はなかったと言える。

また、2015年の記事では、神戸新聞が、阪神・淡路大震災の被災者の目線から東日本大震災を捉えるというアプローチが見られた。この点は、地方紙と全国紙の大きな違いの一つとして検証したが、このアプローチはいつまで見られるものなのだろうか。近い将来予想される南海トラフ地震やその他の大きな震災が発生した時に、もし神戸が非被災地となった場合、その震災に対してどのようなアプローチをするのかという点については、現在は検証することができないが、新たな疑問として残したい。

[注]

1) ここでは、同年に発生したオウム真理教による地下鉄サリン事件も踏まえた上で「1995年は」という書き出しになっている。

2) 武庫川は兵庫県南東部を流れる河川であり、下流域では、兵庫県西宮市と同県尼崎市の境界となっている。ここでいう武庫川は、下流域を指している。

[参考文献]

荻野昌弘・蘭信三編著，2014，『3・11以前の社会学——阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』生活書院。

小城英子，1997，『阪神大震災とマスコミ報道の功罪——記者たちの見た大震災』明石書店。

黒田展之・津金澤聡広編著，1999，『震災の社会学——阪神・淡路大震災と民衆意識』世界思想社。

松井一洋，2012，「雑誌『新聞研究』における阪神淡路大震災後と東日本大震災後の論説の比較」『広島経済大学研究論集』34(4):13-28。

三木康弘，1996，『震災報道いまはじまる——被災者として論説記者として一年』藤原書店。

中林一樹・村上大和，1998，「阪神・淡路大震災に関する新聞報道の比較分析：阪神版と東京版の情報の相違について(VII. 被災者の自立と社会的支援 その2,第VIIセッション，第8回(平成10年度)地域安全学会研究発表会)」『地域安全学会論文報告集』地域安全学会 8:226-231。

立木茂雄，2016，『災害と復興の社会学』萌書房。

山中茂樹，2015，『震災とメディア—復興報道の視点』世界思想社。

———，2018，「阪神大震災と災害報道」『災害復興研究』9: 131-135。